

中小企業によるアントレプレナーシップとしての 国際化にかんする研究動向

—Hist Cite によるシステマティック・レビュー—

関 智 宏
曾 我 寛 人

- I はじめに
- II 方法——論文のマッピング——
 - II-1. データの収集と選定
 - II-2. 影響の大きい関連文献の追加
- III 結果
 - III-1. データとしての検討対象論文の特徴
 - III-2. 引用マッピング
- IV 発見事実
- V ディスカッション
- VI 小結

I はじめに

企業の事業活動の国際化とアントレプレナーシップにどのような関連があるのかについては、国際アントレプレナーシップ (international entrepreneurship) として知られる概念に表出されるように、国際ビジネスならびにアントレプレナーシップのそれぞれの研究領域だけでなく、それらの研究領域が交差した新しい研究領域のなかで大きなムーブメントになってきた。1980年代後半からその概念が提唱されるようになり (Morrow, 1988; Weaver, 1987), 1990年代にはその概念の精緻化が取り組まれた (Dana et al., 1999; Giamartino et al., 1993; Hisrich et al., 1996)。そして2000年にはその後の研究に大きな影響を及ぼすことになった McDougall and Oviatt (2000) が発表されるとともに、専門雑誌として2003年には *Journal of International Entrepreneurship* が、さらに2005年には *International Entrepreneurship and Management Journal* が相次いで刊行されるなど、今日に至るまでさまざまな議論が展開されている (Nummela et al., 2020; Schwens et al., 2018)。

国際アントレプレナーシップは、国際ビジネスならびにアントレプレナーシップのそれぞれの研究領域が統合した独自の研究領域として確立されたが、その用語が示すと

り、この概念は、基本的にはアントレプレナーシップについて問うものである (McMullen et al., 2021)。すなわち、一般のアントレプレナーシップと比較したさいに、国際アントレプレナーシップがどのように相違しているのかに焦点を当てている。McMullen らが指摘したように、国際アントレプレナーシップは、アントレプレナーシップを「名詞」として扱うサブコミュニティであり、主流のアントレプレナーシップとの差別化を図ったり、隣接する分野に関心のある問題の解決策としてアントレプレナーシップを提唱したりすることで、そのような差別化を行っている (McMullen et al., 2021)。

McMullen らは「名詞」としてのアントレプレナーシップのほかに、「形容詞」としてのアントレプレナーシップ (entrepreneurial) についても指摘している。「形容詞」のコミュニティは、より起業的なものとそうでないものとはどのように違うのかを説明することで、自分たちの関心のある構成要素を、自分たちの中心的な名詞の広範な扱いと区別しようとする (McMullen et al., 2021, p.1202)。ここで重要なことは、たとえば構成要素がいくつかあるとして、それらの構成要素のすべてを持っているわけではないが、一部のエージェント (個人または集団) が、なぜそれらの要素に基づいて行動することを選択したのかを説明することにある。国際アントレプレナーシップの議論は盛り上がりを見せてきたが、「形容詞」としてのアントレプレナーシップから国際化をみる、すなわち、アントレプレナーシップの観点からみた企業行動としての国際化 (entrepreneurial internationalization) については、McMullen らもとりあげておらず²、いくつかの例外を除いて、ほとんど議論が展開されていない。

その限られた例外であり、かつ国際アントレプレナーシップの議論が勃興しつつある2000年代初頭に発表されたものとして、Jones and Coviello (2005) の研究をとりあげ³る。Jones and Coviello (2005) は、ある時間内のアントレプレナー的な行動プロセスと

- 1 McMullen et al. (2021) では、McMullen らがかつて指摘したことに触れながら、この点について説明している。たとえば、殺人を犯すために必要な基準を満たしているにもかかわらず、すべての容疑者が殺人を犯すわけではない (McMullen & Dimov, 2013)。刑事は、容疑者の間に存在する詳細のばらつきを考慮しなければならない (たとえば、どのように動機付けられたか、または機会がどのように困難であったか) (McMullen et al., 2021, pp.1210-1211)。
- 2 McMullen らがとりあげる形容詞としてのアントレプレナーシップのトピックは、(1) entrepreneurial orientation, (2) entrepreneurial intention, (3) entrepreneurial cognition, and (4) entrepreneurial action の4つである。
- 3 McMullen et al. (2021) と同様に、Andersson (2000) も起業の視角 (entrepreneurial perspective) から企業の国際化を論じている。Anderson によれば、ビジネスの国際化は、企業の戦略の一部または結果であるために、行動を引き起こす企業家が存在しなければ国際化は生じないとし、スウェーデンの3社のケース・スタディから、国際的なプッシュ戦略を実行するマーケティング企業家、技術開発に焦点を当てた戦略を実行し、国際的なプル戦略を生み出す技術企業家、そして国際的な産業再編を実行する構造企業家、という3つの異なるタイプの企業家を導出することで、それぞれ異なる国際ビジネスを展開していることを明らかにした。このように、Andersson (2000) ではアントレプレネリアルという用語がもちいられているが、アントレプレナーシップの焦点が、行動を引き起こす企業家個人に焦点を当てていることから、本研究とは視点が異なる。

いう観点から国際化を概念化しようと試みている。アントレプレナーシップを、個人レベルと企業レベルの両方のレベルにおいて、時間の経過にともなった起業の出来事に表出される行動のプロセスとして、また国際化を時間をかけた企業家の行動プロセスとしてそれぞれ捉えることで、起業の国際化プロセスの一般モデルおよび実証可能なモデルを提示した⁴。国際化の担い手は、企業一般であったが、どちらかといえば大企業であった（Jones and Coviello, 2005）。それは、その関心の中心の1つにあった時間の概念、すなわち、国際化の初期段階に焦点を当てた国際ニュー・ベンチャー（international new venture）（Oviatt and McDougall, 1994）における、国際ビジネスを開始するのに要した時間（Reuber and Fischer, 1997；McNaughton, 2000）や、国際化が進展する速度や割合（Coviello and Munro, 1997；Jones, 1999）が、一般の中小企業の研究と国際ニュー・ベンチャーの研究とを区別する重要な要素となったためである（Jones and Coviello, 2005）。

しかし、国際ビジネスの研究領域では、国際ニュー・ベンチャーのような短期間での急成長を志向する企業の活動のみを対象としてきたわけではなく、コンテキストやダイナミクス、そして多様性を探求することで「早さ」だけに制約を受けない、国際アントレプレナーシップ研究の新しい方向性が示されている（Reuber et al., 2017）。さらにアントレプレナーシップの研究領域では、アントレプレナーシップの概念に急成長事業だけではない企業の日常的な諸活動とともにそれらの担い手として中小企業をも含むようになってきている（Welter et al., 2017）。さらに国際ビジネスの研究領域以外のさまざまな研究領域で、中小企業の国際化についての議論が活性化している（Dabić et al., 2020；Steinhäuser et al., 2020；Welch et al., 2016）。このように国際ビジネスやアントレプレナーシップの研究領域でその現象をより広く包括していくような研究や、さらにさまざまな研究領域での中小企業の国際化についての議論が展開されている。しかし、かつて国際ビジネスならびにアントレプレナーシップのそれぞれの研究領域が統合した独自の研究領域として国際アントレプレナーシップの概念が確立されてきたこととは対照的に、中小企業によるアントレプレナーシップとしての国際化については一部の例外（Nummela et al., 2020；Reuber et al., 2017）を除いてほとんど検討されておらず⁵、議論

4 ここでの一般モデルでは、Jones（1999）を参考としながら、特定の基準点でのイベントと、特定の期間に発生するプロセスが描かれており、そのパターンや詳細から、任意の基準時または一定期間におけるモードや国の構成、新しい事象の発生率、発生順序、時間経過に伴う活動の強さ、事象の発生時期が早いか遅いか、または均等に分布しているかどうかを関連させながら、記述することができると提案する（Jones and Coviello, 2005, pp.292-294）。

5 なお Reuber らは、Oviatt と McDougall が、「将来の商品やサービスを創造するために、国境を越えて機会を発見し、実行し、評価し、活用すること」という機会の追求（pursuit of opportunity）に基づくアントレプレナーシップとしての国際化（entrepreneurial entrepreneurship）という概念を指摘している点を取りあげているが（Reuber et al., 2018, p.413）、Oviatt and McDougall（2005 b）では、そのタイトルがアントレプレナーシップ「の」国際化（internationalization of entrepreneurship）となっているよう

の余地があると考ええる。

そこで本研究では、「中小企業によるアントレプレナーシップとしての国際化」がはたしてどのような特徴を有するのであろうかという問いを解明していくことを目的に、その概念化を目指し、最近までの関連する諸研究の動向をシステマティック・レビューによって体系的に把握することを目的とする。

II 方法——論文のマッピング——

科学的知識の成果が広く知られるための手段の1つは文献の公表である。広範囲の領域にまたがって数多く存在する文献のなかで、おもな領域を特定するためには、文献の体系的なレビュー、すなわちシステマティック・レビューを行う必要がある (Kraus et al., 2014; Xi et al., 2015)。システマティック・レビューは、恣意的に検討対象の文献を恣意的に選択する方法と異なり、透明性があり、かつ再現性があることを確認することができるために推奨された方法として知られている (Liñán and Fayolle, 2015; Pittaway and Cope, 2007; Tranfield et al., 2003)。

システマティック・レビューのためにもちいられる分析方法として、書誌学 (bibliometrics) における手法の1つである引用分析があげられる (Liñán and Fayolle, 2015; Xi et al., 2015)。引用は、科学的なアイデアの概念的な相互関係を可視化するものとされている (Garfield, 1979; Small 1978)。引用分析を行うことによって、引用と引用された著者や出版物との関係や、分析に用いた出版物のなかで、どの引用元の影響が大きいかを明らかにすることができる (Gundolf and Filser, 2013)。

そこで本節では、「中小企業によるアントレプレナーシップとしての国際化」に関連した文献の体系的なレビューを行うための、本研究における検討対象の選定方法を説明していく。具体的には、キーワードなどによる論文の収集方法に加えて、収集した論文のデータベースを基に行った引用分析の方法について説明する。

II-1. データの収集と選定

レビュー対象となる論文を収集するにあたって、Clarivate社の分析ツールであるWeb of Science™のプラットフォーム (Version 5.35) を活用した。Web of Science™では、いくつかのキーワードを入力して文献を検索するが、ここでは「中小企業によるアントレプレナーシップとしての国際化」を体現するものとして、「entrepreneurial」, 「internationali*」の2つをトピックのキーワードとし、それに加えて「small business」ある

↘ に、国際アントレナーシップ (international entrepreneurship) の概念として説明されている (Oviatt and McDougall, 2005 b, p.7)。

いは「SMEs」のいずれかを含む文献を検索した。なお、国際化を意味する英語には「internationalization」と「internationalisation」の2つがある。これら双方を同時に抽出するために、「*」を語中につけることで検索した。検索は、2020年11月7日に行った。

Web of Science™では、いくつかの条件を指定することで検索結果を絞り込むことができる。そこでドキュメントタイプをARTICLEとREVIEWの2つとした。システムティック・レビューの対象には、「検証済みの知識」としてのジャーナル論文のみとすることがあるため（Podsakoff et al. 2005）、本研究の検討対象にBOOK CHAPTERを加えないことにした。検索した結果、237本の論文が抽出された。この文献データをマークリストに保存し、引用文献も含めるようチェックしたうえで、エクセルデータとテキストデータに落とし込んだ。そのなかでの論文の重複は1本であった。検討対象をARTICLEとREVIEWに限定していたが、エクセルデータの文献データベースを確認したところ、書籍に掲載された文献7本が含まれていた。あらためて本研究の検討対象を論文に限定するため、これら7本の文献をリストから除外した。ここまでで対象論文は229本となった。

この229本の論文データを対象に、筆者らは、2020年11月末から2021年1月中旬にかけて、論文の抄録すべてを4度にわたって互いに確認し合い、中小企業の国際化、さらにアントレプレナーシップに明らかに関連しないと考える論文81本を抽出し、これらの論文を検討対象から除外した。検討対象から除外された論文が多いのは、InternationalやEntrepreneurshipに関連したタイトルのついたジャーナルが多く刊行されているために、トピックだけの検索ではこれらのジャーナルを拾いあげてしまうためである。本研究の分析対象となる論文は、最終的に148本となった。

II-2. 影響の大きい関連文献の追加

上のキーワードのいずれかを含んでいない論文は、Web of Science™での検索では拾いあげることができないため、本研究に関連する論文を包括的に収集できていない可能性が考えられた。そこで、上のキーワードは含んでいないが、影響の大きい論文を含めることにした。Web of Science™から落とし込んだテキストデータを、引用分析のソフトであるHistCite™（Version 12.03.17）にインポートした⁶。そして、HistCite™のCite Reference機能を使って被引用件数（レコード）を示し、これが「30」以上の文献12本のうち、他の研究に与える影響は大きいと明らかに国際化やアントレプレナーシップに関連しないとみなされる論文1本（表1の表中9番）を除く、11本を検討対象に含め

6 HistCite™（Version 12.03.17）を使用したPCのブラウザはInternet Explorer（IE）の（Version 11）であるが、HistCite™を動かすためには、IEの設定と、さらに変換するテキストデータの一部タイトルの変更が必要となる。この点の詳細については、関（2021）を参照のこと。

ることとした。これにより、本研究で収集した論文は159本となる。なお、検討対象に含めることとした11本の論文のうち2本の論文(表1の表中10番と11番)はWeb of Science™上にデータが示されなかったため、後にテキストデータに手動で追加した。この手動で追加した2本の論文の参考文献は、収集した論文リスト内での引用(TLCs)を完全に反映しておらず、引用分析ができていないことをここで指摘しておく。

表1 検討対象として追加する文献リスト

	著者	刊行年	ジャーナル	被引用件数
1	Johanson and Vahlne	1977	Journal of International Business Studies	60
2	Oviatt and McDougall	1994	Journal of International Business Studies	58
3	Oviatt and McDougall	2005	Entrepreneurship Theory and Practice	53
4	Knight and Cavusgil	2004	Journal of International Business Studies	52
5	McDougall and Oviatt	2000	Academy of Management Journal	48
6	Lumpkin and Dess	1996	Academy of Management Review	47
7	Jones et al.	2011	Journal of Business Venturing	44
8	Johanson and Vahlne	2009	Journal of International Business Studies	42
9	Barney	1991	Journal of Management	36
10	Madsen and Servais	1997	International Business Review	34
11	Coviello and Munro	1997	International Business Review	32
12	Reuber and Fischer	1997	Journal of International Business Studies	31

出所：筆者作成

本研究では、影響の大きな論文をもとに引用分析を行っていくため、本研究のようにシステムティック・レビューやメタ分析などといった手法が取り入れられている論文(レビュー論文とする)は、いくつかの分野にまたがって大きな影響を与えるために、本研究での引用分析がうまく行えない可能性が考えられた。そこでこれらのレビュー論文を論文データベースから検索し、11本の論文を抽出した。以下で、引用分析を行っていくさいには、これら11本のレビュー論文は除外した148本の論文を検討対象とする。

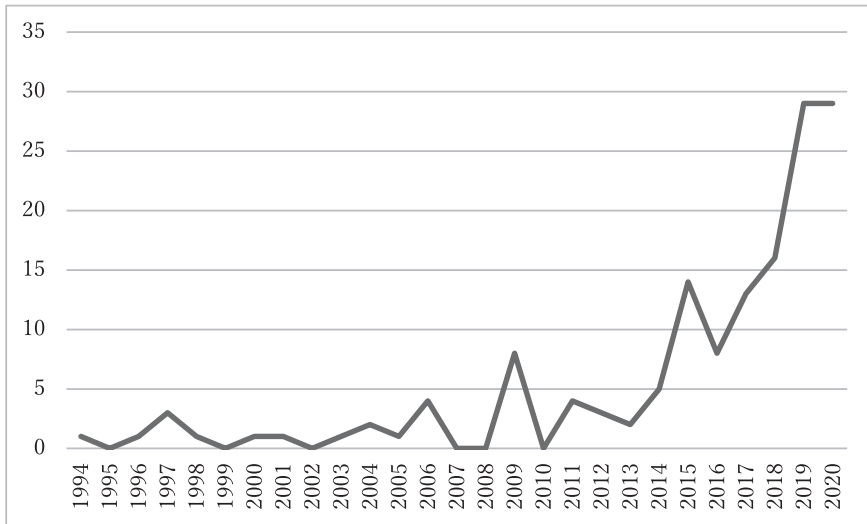
Ⅲ 結 果

Ⅲ-1. データとしての検討対象論文の特徴

HistCite™では、上でとりあげたCite Referenceの機能のほかに、刊行年の傾向を示したYearly output, 論文の著者の傾向を示したAuthor, 論文が掲載されたジャーナルの種別傾向を示したJournal, そして論文のキーワードの傾向を示したWordといった機能がある。以下では、これらの結果を基に、検討対象論文の特徴について説明する。

まず、Yearly output, すなわち刊行年の傾向についてみていく。本研究で収集した148本の論文の刊行年の傾向を示したものが図1である。なおここでは、刊行年がもっ

図1 刊行年の傾向



出所：筆者作成

とも古い1977年のものを除外して図示している。図1によると、2014年までは、2009年を除いて5本以内であった論文の数が、2014年以降にその数が次第に増え始め、10～15本程度となり、2019年にはさらにその数が急激に増加し、2019年と2020年には30本近い論文が刊行された。

次に、Author, すなわち著者の傾向についてみていく。本研究で収集した148本の論文の著者の傾向を示したものが、次の表2ならびに表3である。表2は、Recs, すなわち収集した148本の論文の著者、表3は、TLCS, すなわち収集した148本の論文で引用されている文献を含めた著者、のそれぞれの傾向を示している。表2および表3にRecsとTLCSに並べて記載されているTGCSは、Web of Science™に収録されている文献で引用されている文献を含めた著者の数を示している。まず表2（Recsは3以上）によると、もっとも多いのが、5本の論文の著者として名を連ねているZuchella, A.があげられる。収集した論文のなかでは執筆した論文は多いが、TLCSとして表される引用の影響の大きさは12と必ずしも多くない。そこで、引用の影響の大きさを示すTLCS順でみた表3（TLCSは10以上のみ記載）によると、McDougall, P. P.とOviatt, B. M.がともに150、またJohanson, J.とVahlne, J. E.がともに101となっており、その時点であるCavusgil, S. T.とKnight, G. A.の52を大きく引き離している。これらから論文の著者別にみると、McDougall, P. P.とOviatt, B. M., さらにJohanson, J.とVahlne, J. E.といった著者らの研究がその後の研究展開に与えた影響が大きいことがわかる。

表2 論文の著者の傾向 (Recs 順) Recs \geq 3

	Author	Recs	TLCS	TGCS
1	Zucchella A	5	12	91
2	Ciravegna L	4	15	130
3	Glavas C	4	5	64
4	Hagen B	4	10	98
5	Kuivalainen O	4	7	45
6	Mathews S	4	5	64
7	Crick D	3	8	86
8	Dimitratos P	3	5	65
9	McDougall PP	3	150	3319
10	Oviatt BM	3	150	3319
11	Torkkeli L	3	4	24

出所：筆者作成

次に、Journal, すなわち収集した論文が掲載されたジャーナルの傾向についてみていく。本研究で収集した148本の論文が掲載されたジャーナルの傾向を示したものが、次の表4ならびに表5である。表4は、Recs, すなわち収集した148本の論文が掲載されたジャーナル、表5は、TLCS, すなわち収集した148本の論文で引用されている文献が掲載されたジャーナル、のそれぞれの傾向を示している。TGCSは、Web of Science™ に収録されている文献で引用されている文献を含めたジャーナルの数を示している。表4によると、収集した論文がもっとも多く掲載されたのは、*Journal of International Entrepreneurship* であり、その収録論文数 (Recs) は14本 (収録論文全体の9.5%) であり、*International Marketing Review* が13本 (収録論文全体の8.8%)、*International Business Review* が12本 (収録論文全体の7.4%) と続いている。ここで注視すべき点は2つである。1つは、収集した論文がもっとも多く掲載されたジャーナルとして *Journal of International Entrepreneurship* が1位となっている点である。上述のように、このジャーナルは2003年に刊行された、アントレプレナーシップと国際ビジネスの研究領域が統合されてできた新しい学術領域のジャーナルである。しかし TLCS は発行年が比較的新しいためか3と高くない。収集した論文の参考文献の傾向 (TLCS) を示した表5によれば、もっともその数が多いのが、国際ビジネスの研究領域を代表する *Journal of International Business Studies* となっている。もう1つの注視すべき点は、*Journal of International Business Studies* や *International Business Review* という国際ビジネスの研究領域でのジャーナルだけでなく、*International Marketing Review* というマーケティングの研究領域でのジャーナルが収集した論文に多く、さらに引用文献にも多いという点である。

表3 論文の著者の傾向 (TLCS 順) TLCS \geq 10

	Author	Recs	TLCS	TGCS
1	McDougall PP	3	150	3319
2	Oviatt BM	3	150	3319
3	Johanson J	2	101	6202
4	Vahlne JE	2	101	6202
5	Cavusgil ST	1	52	1162
6	Knight GA	1	52	1162
7	Dess GG	1	48	3393
8	Lumpkin GT	1	48	3393
9	Fischer E	2	33	576
10	Reuber AR	1	32	567
11	Mort GS	1	17	247
12	Weerawardena J	2	17	347
13	Bell J	1	16	194
14	Loane S	1	16	194
15	Ciravegna L	4	15	130
16	Zucchella A	5	12	91
17	Rose EL	2	11	162
18	Hagen B	4	10	98

出所：筆者作成

表4 論文が収集されたジャーナルの傾向（Recs 順）Recs ≥ 3

	Journal	Recs	TLCS	TGCS
1	JOURNAL OF INTERNATIONAL ENTREPRENEURSHIP	14	3	80
2	INTERNATIONAL MARKETING REVIEW	13	70	929
3	INTERNATIONAL BUSINESS REVIEW	12	22	241
4	JOURNAL OF INTERNATIONAL BUSINESS STUDIES	8	248	10032
5	INTERNATIONAL ENTREPRENEURSHIP AND MANAGEMENT JOURNAL	5	2	87
6	INTERNATIONAL SMALL BUSINESS JOURNAL	5	6	164
7	JOURNAL OF SMALL BUSINESS AND ENTERPRISE DEVELOPMENT	5	3	51
8	JOURNAL OF SMALL BUSINESS MANAGEMENT	4	7	250
9	ENTREPRENEURSHIP THEORY AND PRACTICE	3	48	846
10	EUROPEAN BUSINESS REVIEW	3	2	7
11	EUROPEAN JOURNAL OF INTERNATIONAL MANAGEMENT	3	0	1
12	JOURNAL OF BUSINESS RESEARCH	3	8	75
13	SMALL BUSINESS ECONOMICS	3	9	121

出所：筆者作成

表5 論文が収集されたジャーナルの傾向（TLCS 順）TLCS ≥ 4

	Journal	Recs	TLCS	TGCS
1	JOURNAL OF INTERNATIONAL BUSINESS STUDIES	8	248	10032
2	INTERNATIONAL MARKETING REVIEW	13	70	929
3	ACADEMY OF MANAGEMENT REVIEW	1	48	3393
4	ENTREPRENEURSHIP THEORY AND PRACTICE	3	48	846
5	ACADEMY OF MANAGEMENT JOURNAL	1	47	760
6	INTERNATIONAL BUSINESS REVIEW	12	22	241
7	SMALL BUSINESS ECONOMICS	3	9	121
8	JOURNAL OF BUSINESS RESEARCH	3	8	75
9	JOURNAL OF SMALL BUSINESS MANAGEMENT	4	7	250
10	JOURNAL OF WORLD BUSINESS	1	7	66
11	INTERNATIONAL SMALL BUSINESS JOURNAL	5	6	164
12	BALTIC JOURNAL OF MANAGEMENT	2	4	24

出所：筆者作成

次に、Word, すなわち論文のタイトルで使用されたワードの傾向についてみていく。本研究で収集した148本の論文のタイトルで使用されたワードの傾向を示したものが、次の表6ならびに表7である。表6は、Recs, すなわち収集した148本の論文のタイトルで使用されたワード、表7は、TLCS, すなわち収集した148本の論文で引用されている文献のタイトルで使用されたワード、のそれぞれの傾向を示している。なおTGCSは、Web of Science™ に収録されている文献で引用されている文献を含めたワードの数を示している。本研究では、「中小企業によるアントレプレナーシップとしての国際化」を体现するものとして、「entrepreneurial」, 「internationali*」の2つをトピックのキーワードとし、それに加えて「small business」あるいは「SMEs」を含む文献を収集していることから、表6によると、それらに関連したワードが上位にあがっていることがわかる。ここで指摘できる点は、それらのワードに加えて「performance」や「orientation」

表6 論文タイトルで使用されているワードの傾向 (Recs 順) Recs \geq 10

	Word	Recs	TLCS	TGCS
1	INTERNATIONAL	53	254	5202
2	ENTREPRENEURIAL	52	115	4365
3	INTERNATIONALIZATION	39	207	7922
4	SMES	37	65	1265
5	PERFORMANCE	29	83	4352
6	ORIENTATION	25	72	3937
7	INTERNATIONALISATION	23	34	481
8	ROLE	23	14	498
9	SME	19	14	261
10	FIRMS	18	55	719
11	SMALL	18	17	494
12	ENTREPRENEURSHIP	16	136	2286
13	MARKET	14	69	4747
14	BUSINESS	13	12	285
15	EVIDENCE	13	25	359
16	CASE	12	1	79
17	EXPORT	11	15	385
18	INNOVATION	11	58	1382
19	BORN	10	88	1670
20	CAPABILITIES	10	59	1267
21	GLOBAL	10	84	1581
22	MARKETING	10	11	145
23	NETWORK	10	29	335
24	NEW	10	74	2052

出所：筆者作成

表7 論文タイトルで使用されているワードの傾向 (TLCS 順) TLCS 上位 20

	Word	Recs	TLCS	TGCS
1	INTERNATIONAL	53	254	5202
2	INTERNATIONALIZATION	39	207	7922
3	ENTREPRENEURSHIP	16	136	2286
4	FIRM	9	118	5906
5	ENTREPRENEURIAL	52	115	4365
6	MODEL	6	102	6250
7	PROCESS	9	102	6395
8	BORN	10	88	1670
9	GLOBAL	10	84	1581
10	PERFORMANCE	29	83	4352
11	KNOWLEDGE	6	76	4942
12	NEW	10	74	2052
13	ORIENTATION	25	72	3937
14	MARKET	14	69	4747
15	FOREIGN	5	65	4537
16	SMES	37	65	1265
17	COMMITMENTS	1	62	4481
18	DEVELOPMENT	6	62	4562
19	INCREASING	1	62	4481
20	CAPABILITIES	10	59	1267

出所：筆者作成

といったワードが比較的上位にあがっていることである。さらに引用の影響の大きさを示す TLCS 順でみた表 7 によると、「performance」や「orientation」よりも、「model」, 「process」, 「born」, 「global」といったワードがあがっていることがわかる。

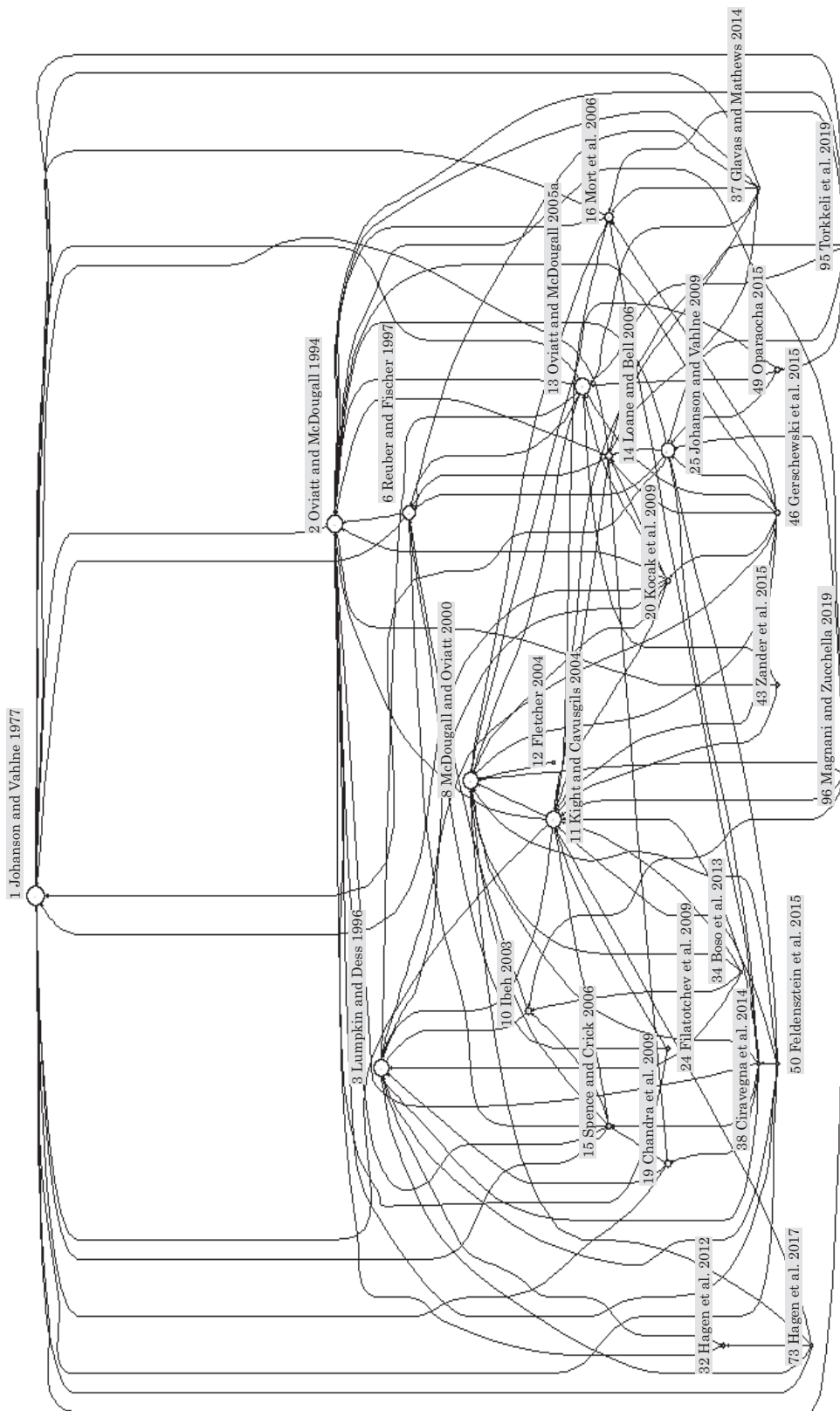
Ⅲ-2. 引用マッピング

続いて、HistCite™ のグラフ作成機能を使って、論文引用の系統図を示していく。本研究では、影響の大きい論文に焦点を当てる。ここでいう影響の大きさは、抽出した論文リスト内での相互引用の数（LCS : Local Citation Score）の多さとする。ここでは 2 つの図を示す。なおこの図で示されたものを引用マッピングと呼ぶ。また、図中では、検討対象となる論文が結節点としてのノードで示されており、引用数が多ければ円が大きくなっている。また引用および被引用はそれぞれの円を線で結ぶリンクとして示されている。また図中では上から下にかけて発行年が古いものから新しいものに論文が並んでいる。なお図中では Gap Year が考慮されており、該当する刊行年に論文がなくともそのスペースを含めて表記されている。

まず 1 つめの図は、この LCS の数を 3 以上としたものである。これを図示したものが図 2 である。ここでは、27 本の論文が抽出された。その一覧を示したものが、表 8 である。LCS の数は、論文リスト内で引用された回数であり、影響度の強さを知るためには、一般的に 5 以上を基本とすることがある（Linneluecke, 2017, p.8）が、ここで LCS の数を 3 以上としたのは、それによって抽出される論文の一定数を確保しようとしたためである。先にみたように、本研究で国際化やアントレプレナーシップに関連して収集した論文は、1990 年代半ばくらいから一定の研究成果が発表されてきたものの、2015 年頃になって急激にその数を増加させていることから、どちらかといえば最近になって拡がりをみせうるテーマであるがゆえに、LCS の数は比較的低い論文が多いことが推察される。

しかし影響度の大きさをみていくためには、LCS の数はやはり一定数以上必要であろう。また上でみたように、ある特定の著者に限ってみれば、LCS の数は他よりも極めて高く、さらにこうした著者たちの研究成果の刊行年は 1990 年代半ばから 2000 年代初頭にかけて、また本研究が対象とする国際化とアントレプレナーシップに関するテーマが勃興しているなかで多く発表されている。そこで、影響度の極めて大きな論文のみを抽出してその影響度をみていくために、LCS の数を 10 以上とした。これを図示したものが、図 3 である。ここでは 10 本の論文が抽出された。その一覧を示したものが、表 9 である。

図2 引用マッピング (LCS≥3, N=27)



出所：筆者作成

表8 引用マッピングに基づく論文リスト（LCS≥3, N=27）

整理番号	管理番号	著者名	刊行年	ジャーナル	LCS	GCS
1	1	Johanson and Vahlne	1977	Journal of International Business	62	4481
2	2	Oviatt and McDougall	1994	Journal of International Business	55	1766
3	3	Lumpkin and Dess	1996	Academy of Management Review	48	3393
4	6	Reuber and Fischer	1997	Journal of International Business	32	567
5	8	McDougall and Oviatt	2000	Academy of Management Journal	47	760
6	10	Ibeh	2003	Small Business Economics	9	92
7	11	Knight and Cavusgil	2004	Journal of International Business	52	1162
8	12	Fletcher	2004	Entrepreneurship and Regional Development	3	81
9	13	Oviatt and McDougall	2005	Entrepreneurship Theory and Practice	48	793
10	14	Loane and Bell	2006	International Marketing Review	16	194
11	15	Spence and Crick	2006	International Marketing Review	7	79
12	16	Mort et al.	2006	International Marketing Review	17	247
13	19	Chandra et al.	2009	International Marketing Review	9	154
14	20	Kocak et al.	2009	International Marketing Review	8	84
15	24	Filatotchev et al.	2009	Journal of International Business	4	235
16	25	Johanson and Vahlne	2009	Journal of International Business	39	1721
17	32	Hagen et al.	2012	International Business Review	5	65
18	34	Boso et al.	2013	International Small Business Journal	3	59
19	37	Glavas and Mathews	2014	International Business Review	3	40
20	38	Ciravegna et al.	2014	Journal of Business Research	5	63
21	43	Zander et al.	2015	Journal of International Business	4	96
22	46	Gerschewski et al.	2015	Journal of World Business	7	66
23	49	Oparaocha	2015	International Business Review	7	55
24	50	Feldensztein et al.	2015	Journal of Small Business Management	6	51
25	73	Hagen et al.	2017	European Management Review	3	11
26	95	Torkkeli et al.	2019	International Marketing Review	3	18
27	96	Magnani and Zucchella	2019	International Marketing Review	3	6

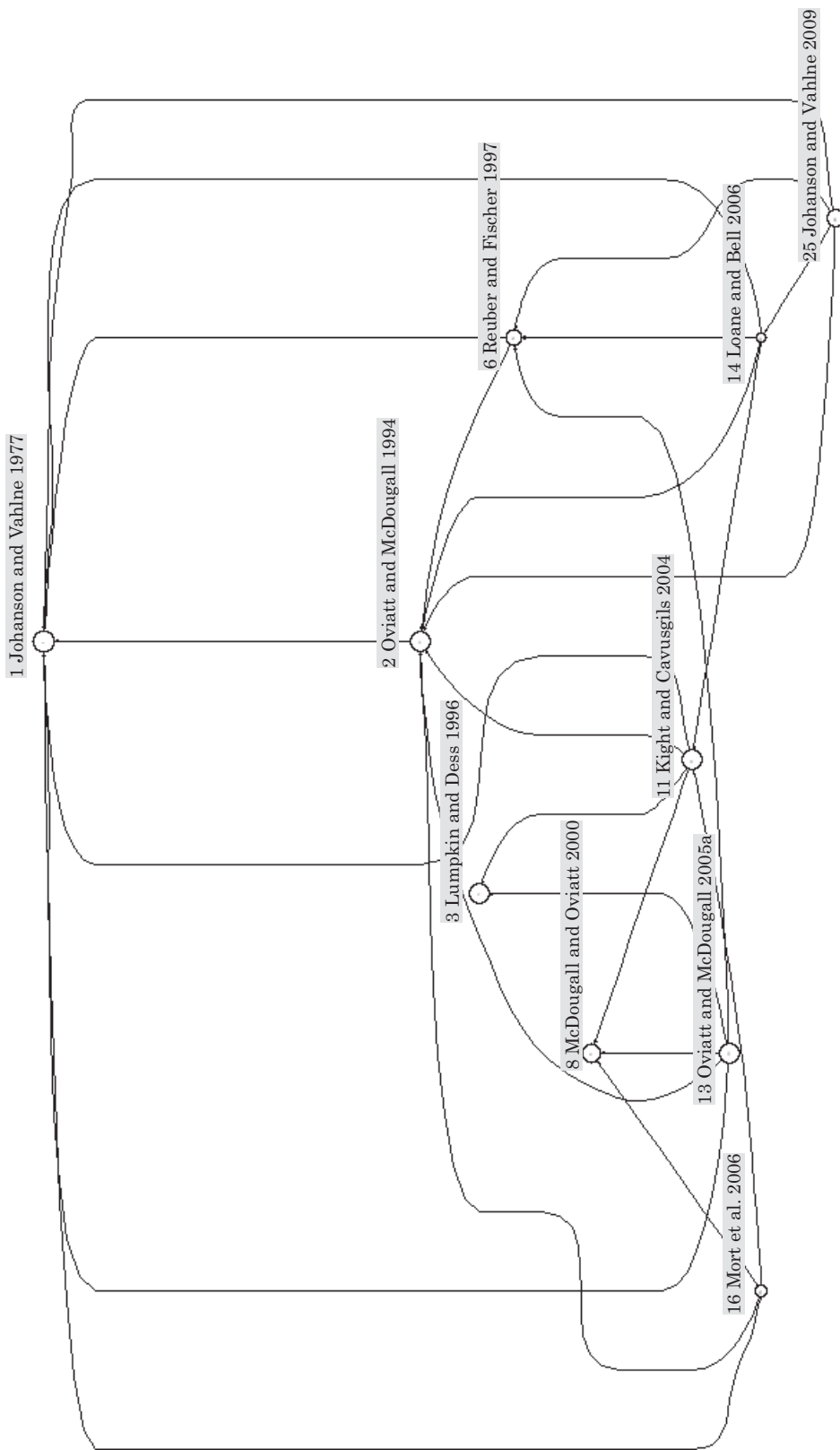
出所：筆者作成

表9 引用マッピングに基づく論文リスト（LCS≥10, N=10）

整理番号	管理番号	著者名	刊行年	ジャーナル	LCS	GCS
1	1	Johanson and Vahlne	1977	Journal of International Business	62	4481
2	2	Oviatt and McDougall	1994	Journal of International Business	55	1766
3	3	Lumpkin and Dess	1996	Academy of Management Review	48	3393
4	6	Reuber and Fischer	1997	Journal of International Business	32	567
5	8	McDougall and Oviatt	2000	Academy of Management Journal	47	760
6	11	Knight and Cavusgil	2004	Journal of International Business	52	1162
7	13	Oviatt and McDougall	2005	Entrepreneurship Theory and Practice	48	793
8	14	Loane and Bell	2006	International Marketing Review	16	194
9	16	Mort et al.	2006	International Marketing Review	17	247
10	25	Johanson and Vahlne	2009	Journal of International Business	39	1721

出所：筆者作成

図3 引用マッピング (LCS ≥ 10 , N = 10)



出所：筆者作成

IV 発見事実

前節での分析結果から導出された発見事実は、以下の諸点にまとめることができる。

第1に、少なくとも3つの論文に端を発する3つの研究潮流がある。なおここで潮流と言う根拠は、引用マッピングのなかで、それらの論文が刊行される以前の論文と結びついていないからである。これは、他の論文とは異なる引用を行っていることを意味し、これまでとは異なる視座により検討がなされているということになる。研究潮流の1つは、収集した文献リストのなかではもっとも刊行年が古い Johanson and Vahlne (1977) に端を発するものである。この論文は、その後、多面にわたって引用されていることも同時に確認できるが、またこの論文は、その後 *Journal of International Business Studies* に掲載され、かつ国際ニュー・ベンチャーの理論構築を目指した Oviatt and McDougall (1994) に引用され、さらに研究の拡がりをみせているが、それぞれの刊行年には17年の開きが生じていることがわかる。

研究潮流の2つは、Lumpkin and Dess (1996) に端を発するものである。この論文は、経営学領域で非常に影響度の大きいことで知られる *Academy of Management Review* に掲載された、起業志向 (Entrepreneurial Orientation: EO) の特性およびその企業成果との関連を解明しようとしたものである。ここでは、EO は、自律性、イノベティブネス、リスクテイク、積極性、競争業者への攻撃性 (competitive aggressiveness) の5つから構成されるものとされている。

研究潮流の3つは、McDougall and Oviatt (2000) に端を発するものである。この論文は、影響度の大きい *Academy of Management Review* に掲載されており、国際ビジネスとアントレプレナーシップの2つの研究経路が交差する研究テーマとして、国際アントレプレナーシップ (International Entrepreneurship) という概念が提唱されている。ここで国際アントレプレナーシップとは、「国境を越え、組織の価値を創造することを目的とした、革新的で、積極的で、リスクを追求する行動の組み合わせ」を意味する (McDougall and Oviatt, 2000, p.903)。この論文では、同じ著者たちによる Oviatt and McDougall (1994) は引用されていない。

第2に、これら3つの研究潮流はその後複雑に絡み合っているが、2000年代半ばに発表された、Knight and Cavusgil (2004) ならびに Oviatt and McDougall (2005 a) が、これら3つの研究潮流を統合した結節点となっている。Knight and Cavusgil (2004) は、*Journal of International Business Studies* に掲載された、早期国際化を行うボーン・グローバル企業 (Born-Global Firm) について検討したものである。ボーン・グローバル企業は、設立して間もないがゆえに資源が不足しているが、短期間で海外に市場を展

開することで優れた国際業績を持つ企業であり、その企業のイノベティブな文化、知識、能力といった諸点に焦点が当てられる。

Oviatt and McDougall (2005 a) は、アントレプレナーシップの研究領域で影響力が大きいとされる *Entrepreneurship Theory and Practice* に掲載された、国際アントレプレナーシップの再定義を試みるものである。国際アントレプレナーシップの概念は、McDougall and Oviatt (2000) で初めて提唱されたが、Oviatt and McDougall (2005 a) では、アクターとしての企業家の起業認識に始まり、技術的な要素、競争といった動機の要素、アントレプレナーの認識に関する媒介的要素、そして、知識とネットワークといった交互作用的要素が、国際化のスピードに影響を与えうるとし、国際アントレプレナーシップの新たなモデルが提示された。

第3に、2000年代半ば以降に、多角的な視座から検討が始まったということが示唆された。図3をみると、2006年に *International Marketing Review* で論文が多く発表されているが (Loane and Bell, 2006; Mort et al., 2006; Spence and Crick, 2006), これは、New perspectives on international entrepreneurship (国際アントレプレナーシップにかんする新しい視角) という内容で特別号が組まれたためである。そこからマーケティングの研究領域がそれまでの研究潮流に統合している (Chandra et al., 2009; Kocak et al., 2009)。さらに2010年代 (とくに2015年以降) には、国際ビジネスやマーケティング、さらには経営戦略といったさまざまな研究領域とがさらに複合的に統合し合うようになる。たとえば、戦略的行動 (Hagen et al., 2012; Magnani and Zucchella, 2019) や戦略的姿勢 (strategic posture) (Hagen et al., 2017), 資源ベース (Gerschewski et al., 2015), ケイパビリティ (Glavas and Mathews, 2014), コンピテンス (Torkkeli et al., 2019), 制度のネットワーク (Oparaocha, 2015), 市場志向 (market orientation) (Boso et al., 2013), 国際化の発端 (inception) (Ciravegna et al., 2014) や国際化の (地理的) 範囲 (internationalization scope) (Felzensztein et al., 2015) などのさまざまな研究領域における視座を複合的に組み合わせた多角的な研究が本格的に行われるようになった。

V ディスカッション

ここでは、研究潮流の3つめに提示した McDougall and Oviatt (2000) の位置づけ、またそれ以降に発表された2000年代半ば以降の研究動向がどのような特徴を有するかについてまず議論する。そのうえで、「中小企業によるアントレプレナーシップとしての国際化」の射程について議論していく。

McDougall と Oviatt は、McDougall and Oviatt (2000) を発表する以前に、本研究に関連した研究成果として Oviatt and McDougall (1994) を発表している。この論文は、

Journal of International Business Studies に掲載されているが、前節で指摘した3つの研究潮流のなかの1つである Johanson and Vahlne (1977) を引用しており、国際ニュー・ベンチャーの理論構築を目指したものである。Oviatt and McDougall (1994) は、具体的には、国際ビジネス、アントレプレナーシップ、戦略的経営の各理論を統合したフレームワークが提示された。

そもそも Johanson and Vahlne (1977) は、*Journal of International Business Studies* に掲載された、スウェーデンの4社の企業を対象に、実証分析の結果に基づいて、企業の国際化のプロセスにかんするモデル、具体的には輸出から代理店をつうじた販売、販売子会社の設立、そして現地生産に至るプロセスのモデルの構築を試みたものである。これはスウェーデンのウプサラ大学での実証研究であったことから、その後その名前をとってウプサラ・モデルとして知られるようになった古典とも位置づけられる研究である。この論文は、ウプサラ・モデルとして国際化の発展的なステージが良く知られているが、実際に現象から明らかにしたのは、国際化の動的なメカニズムであり、市場の知識と市場コミットメントが含まれる状態 (state) の側面と、コミットメントの決定と現在の活動が含まれる変化 (change) の側面との相互作用である (Welch et al. 2016)。たとえば、市場に対するコミットメントによる経験は、そのときの活動 (current activities) に影響を与えるものであり、また、市場知識が増えると問題や機会の認識につながることからコミットメントの決定に影響を与えるものである。そして、コミットメントの決定により、持続的にコミットメントし続けることによって市場の知識が獲得でき、市場コミットメントを形成するのである。

Johanson and Vahlne (1977) は、それが刊行されてから17年後となる1994年に、Oviatt and McDougall (1994) のなかで引用されることになる。Oviatt and McDougall (1994) では、国際ニュー・ベンチャーの理論構築のためのフレームワークが示されているが、そのなかでは、国際ニュー・ベンチャーの存在に必要なかつ十分な要素として、(1) 一部の取引の内部化による組織形成、(2) 資源へのアクセスのための代替的なガバナンス構造への強い依存、(3) 海外での立地の優位性の確立、(4) 独自の資源の支配という4つが説明されている。国際ビジネス、アントレプレナーシップ、戦略的経営という3つの研究領域を横断したフレームワークを提示した点が独創的である。

McDougall and Oviatt (2000) は、McDougall and Oviatt (1997) に掲載されている発表論文のグループ化を基に、国際ビジネスとアントレプレナーシップの2つの研究経路が交差する頻度が高まっていることを指摘する。具体的には、国際ビジネスの研究者は、従来の多国籍大企業に焦点を当てた研究から、アントレプレナーシップに富んだ企業を研究課題に加えるようになってきている。また、アントレプレナーシップの研究者にとっても、国境を越えたビジネス活動への関心が高まっている。McDougall and Oviatt

(2000) では、そうした2つの研究経路の交差から、国際アントレプレナーシップという研究領域を提案している。

ここで留意すべき点は、McDougall and Oviatt (2000) では、Oviatt and McDougall (1994) で主要なキーワードの1つであった国際ニュー・ベンチャーという用語が、使われなくなった(戦略的経営の研究領域をこの時点で除外した)ことにある。この理由は定かではないが、考えられうる1つの理由としては、その当時におけるアントレプレナーシップ研究への関心の高まりから、国際ビジネスの文脈でのアントレプレナーシップ研究の新しい研究領域を開拓しようとする意図から、2つの研究領域に絞って既存の研究成果のリストアップをし、それに基づいて概念を提唱したためであろう。その後になって、Knight and Cavusgil (2004) らが提唱するボーン・グローバル企業のような国際化の速度に関する関心が高まるなかで、同じ著者による Oviatt and McDougall (2005 a) では、EO で示された戦略的経営の諸要素とも言うべき諸点を内包した新たなモデルが提示されている⁷。このことから、国際ニュー・ベンチャーが、国際アントレプレナーシップの概念にも内包されたと推察される。またもう1つの理由は、Jones and Coviello (2005) で指摘されているように、Covin and Slevin (1989) で定義された戦略的行動の要素であり、革新的、積極的 (proactive)、リスク追求的 (risk-seeking) な行動と国際化の理解を統合し、国際ニュー・ベンチャーにとどまらず、より大規模で確立された企業の行動を取り入れたためである (Jones and Coviello, 2005)。この Covin and Slevin (1989) で定義された戦略的行動の要素は、その後、Lumpkin and Dess (1996) で初めて EO として、アントレプレナーシップの研究領域に統合していくことになり、2000年代半ばの3つの研究潮流の統合へとつながっていくことになる。

次に議論しておきたい点は、2000年代半ば以降の研究展開である。ここでは発見事実に基づいて2つの点について触れておきたい。1つは、マーケティングの研究領域との統合、さらにその影響の大きさについてである。2006年に *International Marketing Review* で New perspectives on international entrepreneurship (国際アントレプレナーシップにかんする新しい視角) という内容で特別号が生まれ、そこで国際アントレプレナーシップにかかるいくつかの論文が発表された (Loane and Bell, 2006; Mort et al., 2006; Spence and Crick, 2006)。なかでも、Loane and Bell (2006) は、既存のネットワーク・アプローチと、新たに登場した国際化の知識ベース・ビュー (knowledge-based view) を結びつけ、国際化する起業を生む企業 (entrepreneurial firm) のネットワークを調査し、海外市場にかんする知識を深めるために、新規のネットワークが構築されているこ

7 国際ビジネスの研究領域を代表するジャーナルである *Journal of International Business Studies* で2015年に発表された Zander et al. (2015) では、Knight and Cavusgil (2004) の研究を振り返りながら、国際ビジネスの研究領域におけるアントレプレナーシップ研究が、国際アントレプレナーシップとして発展してきていることを指摘している。

とを明らかにしている。このマーケティングの研究領域として位置づけられる Loane and Bell (2006) は、国際ビジネスの先駆的研究である、ウプサラ・モデルの改訂版を提唱した Johanson and Vahlne (2009) に引用された。そして Johanson and Vahlne (2009) では、国際ビジネスにおける企業の問題と機会が、国別の問題ではなく、関係別やネットワーク別の問題になりつつあること、つまり国際ビジネスにかかる不確実性の根源が、心理的な距離としての外国の重荷 (liability of foreignness) から関連するネットワークとの関係におけるアウトサイダーシップの重荷 (liability of outsidership) へと変化しているとして、当初設定したメカニズムの再考がなされた。マーケティングの研究領域が、国際アントレプレナーシップの研究領域に統合するだけでなく、その内実に大きな影響を与えることとなったと言える。

もう1つは、2010年代（とくに2015年以降）において、国際ビジネスやマーケティング、さらには経営戦略といったさまざまな研究領域とがさらに複合的に統合し合うようになっていったという点である。それらの諸研究にすべてではないにせよ多くに共通していると言えるのは、それまでの主要な議論に、新しい研究の視座を持ち込み、独自のデータを基に実証を試みることで新しい発見事実を導き出し、そして国際アントレプレナーシップという比較的新しい研究領域だけでなく、その研究領域の基礎にある国際ビジネスやアントレプレナーシップといった研究領域にも貢献をしようとする点にある。たとえば、Felzesztein et al. (2015) では、国際化のスピード、とりわけ、ボン・グローバル企業の重要性について示されるようになったが、国際ビジネスとアントレプレナーシップの諸研究に対する中小企業の国際化の地理的な範囲 (geographic scope) の知見が見落とされていると問題視し、さらにラテンアメリカのチリを対象とした実証を試みている。さらに Jin et al. (2018) では、国際アントレプレナーシップと資源ベースの考えを統合し、EO がマーケティング能力を媒介して国際業績や国際化の規模・範囲に対して影響することについて、輸出を行う韓国の中小企業を対象とした実証を行い、EO とパフォーマンスの関係を資源——能力——業績の関係へと拡張している。

このように、2010年代（とくに2015年以降）においては、さまざまな研究領域が複合的に統合し合いながら、中小企業による国際化を検討することで、国際ビジネスならびにアントレプレナーシップといった研究領域でまだ解明されていないギャップを埋めるための実証研究が展開されている。しかし冒頭に指摘したように、近年におけるアントレプレナーシップの研究領域では、国際ニュー・ベンチャーのような短期間での急成長を志向する企業の活動を対象とするだけでない。アントレプレナーシップを起業するという現象に焦点を当てることで、急成長を志向しない企業の日常的な諸活動（たとえば、日々の生活のための事業活動やベンチャー・キャピタルなどの出資を受けず自己資

金での投資活動など)を、さらにそれらの諸活動の担い手として中小企業を含むようになってきている (Welter et al., 2017)。さらには、Jones and Coviello (2005)でも強調されたように、それらの諸活動を時間の経過にともなうプロセスとして (McMullen and Dimov, 2013)、あるいはコンテキスト、ダイナミクス、多様性 (Reuber, et al., 2017)を考慮したかたちでみられるようになってきている。これらの諸点に関連した研究に、Nummela らによる探索的研究がある (Nummela et al., 2020)。Nummela らは、中小企業の国際化をプロセスとしてみると、アントレプレネリアルな国際化とそうでないノン・アントレプレネリアルな国際化とが相互作用していることをイタリアの中小企業の事例から描いている。ここでのノン・アントレプレネリアルな国際化は、国際アントレプレナーシップを構成する諸点を含まない国際化という意味でもちいられている。Nummela らが「すべての中小企業が完全にアントレプレネリアルではないことを認める研究がさらに増えることを期待する」と指摘するように (Nummela et al., 2020)、Welter らが提唱するように、アントレプレナーシップを日常的な諸活動をも含めて捉える点とは異なっている。しかし、Nummela らの、中小企業の国際化には、国際アントレプレナーシップでの諸要素が発出されるときとそうでないときが時間の経過のなかで相互作用するという指摘は、中小企業の国際化は複雑でかつ複雑的なプロセスであるがゆえに、日常的な諸活動をも含めて検討していく余地があることを同時に示していると言える。

VI 小 結

本研究では、「中小企業によるアントレプレナーシップとしての国際化」という視点から、関連しうる諸研究のシステムティック・レビューをつうじて、その研究動向を明らかにした。具体的に明らかにしたのは、1つに、初期にみられた3つの研究潮流、2つに、2000年代半ばでのそれらの研究潮流の統合化、そして3つに、それ以降、とくに2015年以降にみられた新しい研究領域とのさらなる統合による多角的な研究の進展の3点である。

「中小企業のアントレプレナーシップとしての国際化」という場合には、国際化を時間の経過にともなう複雑でかつ複雑的なプロセスとみとくさいに、さまざまな学術領域からの研究成果を踏まえ、中小企業が実践する事業活動に、日常的な諸活動をも含めたかたちで国際化を検討していくことを今後の研究展望として示すことができる。本研究で検討し、具体的に明らかにされた諸点を基にしながら、中小企業によるアントレプレナーシップとしての国際化という概念がいかなる諸要素で構成されるかについて検討していくことが、われわれの今後の研究課題となろう。

参考文献

- Andersson, S. (2000) "The Internationalization of the firm from an entrepreneurial perspective," *International Studies of Management & Organization*, 30(1), 63-92.
- Barney, J. (1991) "Firm resources and sustained competitive advantage," *Journal of Management*, 17(1), 99-120.
- Boso, N., Cadogan, J. W., and Story, V. M. (2013) "Entrepreneurial orientation and market orientation as drivers of product innovation success : A study of exporters from a developing economy," *International Small Business Journal*, 31(1), 57-81.
- Chandra, Y., Styles, C., and Wilkinson, I. (2009) "The recognition of first time international entrepreneurial opportunities," *International Marketing Review*, 26(1), 30-61.
- Ciravegna, L., Majano, S. B., and Zhan, G. (2014) "The inception of internationalization of small and medium enterprises : The role of activeness and networks," *Journal of Business Research*, 67(6), 1081-1089.
- Coviello, N. E. and Munro, H. J. (1997) "Network relationships and the internationalisation process of small software firms," *International Business Review*, 6(4), 361-386.
- Covin, J. G. and Slevin, D. P. (1989) "Strategic management of small firms in hostile and benign environments," *Strategic Management Journal*, 10(1), 75-87.
- Dabić, M., Maley, J., Dana, L.-P., Novak, I., Pellegrini, M. M., and Caputo, A. (2020) "Pathways of SME internationalization : A bibliometric and systematic review," *Small Business Economics*, 55(3), 705-725.
- Dana, L.-P., Etemad, H., Wright, R. W. (1999) "Theoretical foundations of international entrepreneurship," in Wright, R. W. ed., *Research in Global Strategic Management*, 3-22, JAI Press.
- Felzensztein, C., Ciravegna, L., Robson, P., and Amorós, J. E. (2015) "Networks, entrepreneurial orientation, and internationalization scope : Evidence from Chilean small and medium enterprises," *Journal of Small Business Management*, 53(S 1), 145-160.
- Filatovchev, I., Liu, X., Buck, T., and Wright, M. (2009) "The export orientation and export performance of high-technology SMEs in emerging markets : The effects of knowledge transfer by returnee entrepreneurs," *Journal of International Business Studies*, 40(6), 1005-1021.
- Fletcher, D. (2004) "International entrepreneurship and the small business," *Entrepreneurship & Regional Development*, 16(4), 289-305.
- Garfield, E. (1979) "Is citation analysis a legitimate evaluation tool?," *Scientometrics*, 1(4), 359-375.
- Garfield, E. (2004) "Historiographic mapping of knowledge domains literature," *Journal of Information Science*, 30(2), 119-145.
- Gerschewski, S., Rose, E. L., and Lindsay, V. J. (2015) "Understanding the drivers of international performance for born global firms : An integrated perspective," *Journal of World Business*, 50(3), 558-575.
- Giamartino, G. A., McDougall, P. P., Bird, B. J. (1993) "International entrepreneurship : The state of the field," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 18(1), 37-42.
- Glavas, C. and Mathews, S. (2014) "How international entrepreneurship characteristics influence internet capabilities for the international business processes of the firm," *International Business Review*, 23(1), 228-245.
- Gundolf, K. and Filser, M. (2013) "Management research and religion : A citation analysis," *Journal of Business Ethics*, 112, 177-185.
- Hagen, B., Zucchella, A., Cerchiello, P., and de Giovanni, N. (2012) "International strategy and performance : Clustering strategic types of SMEs," *International Business Review*, 21(3), 369-382.
- Hagen, B., Zucchella, A., Larimo, J., and Dimitratos, P. (2017) "A Taxonomy of strategic postures of international SMEs," *European Management Review*, 14, 265-285.
- Hisrich, R. D., Honig-Haftel, S., McDougall, P. P., and Oviatt, B. M. (1996) "International entrepreneurship : Past, present, and future," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 20(4), 5-8.
- Ibeh, K. I. N. (2003) "Toward a contingency framework of export entrepreneurship : Conceptualisations and

- empirical evidence," *Small Business Economics*, 20, 49-68.
- Johanson, J. and Vahlne, J.-E. (1977) "The internationalization process of the firm : A model of knowledge development and increasing foreign market commitments," *Journal of International Business Studies*, 8(1), 23-32.
- Johanson, J. and Vahlne, J.-E. (2009) "The Uppsala internationalization process model revisited : From liability of foreignness to liability of outsidership," *Journal of International Business Studies*, 40(9), 1411-1431.
- Jones, M. V. (1999) "The internationalization of small high technology firms," *Journal of International Marketing*, 7(4), 15-41.
- Jones, M. V. and Coviello, N. E. (2005) "Internationalisation : Conceptualising an entrepreneurial process of behaviour in time," *Journal of International Business Studies*, 36(3), 284-303.
- Jones, M. V., Coviello, N. E., and Tang, Y. K. (2011) "International Entrepreneurship research (1989-2009) : A domain ontology and thematic analysis," *Journal of Business Venturing*, 26(6), 632-659.
- Knight, G. A. and Cavusgil, S. T. (2004) "Innovation, organizational capabilities, and the born-global firm," *Journal of International Business Studies*, 35(2), 124-141.
- Kocak, A., Paliwoda, S. J., and Abimbola, T. (2009) "The effects of entrepreneurial marketing on born global performance," *International Marketing Review*, 26(4/5), 439-452.
- Liñán, F. and Fayolle, A. (2015) "A systematic literature review on entrepreneurial intentions : citation, thematic analyses, and research agenda," *International Entrepreneurship and Management Journal*, 11(4), 907-933.
- Linnenluecke, M. K. (2017) "Resilience in business and management research : A review of influential publications and a research agenda," *International Journal of Management Review*, 19, 4-19.
- Loane, S. and Bell, J. (2006) "Rapid internationalisation among entrepreneurial firms in Australia, Canada, Ireland and New Zealand," *International Marketing Review*, 23(5), 467-485.
- Lumpkin, G. T. and Dess, G. G. (1996) "Clarifying the entrepreneurial orientation construct and linking it to performance," *Academy of Management Review*, 21(1), 135-172.
- Madsen, T. K. and Servais, P. (1997) "The internationalization of Born Globals : An evolutionary process ?," *International Business Review*, 6(6), 561-583.
- Magnani, G. and Zucchella, A. (2019) "Coping with uncertainty in the internationalisation strategy : An exploratory study on entrepreneurial firms," *International Marketing Review*, 36(1), 131-163.
- McDougall, P. P. and Oviatt, B. M. (1997) "International entrepreneurship literature in the 1990s and directions for future research," in Sexton, D. L. and Smilor, R. W. eds., *Entrepreneurship 2000*, 291-320, Chicago : Upstart Publishing.
- McDougall, P. P. and Oviatt, B. M. (2000) "International entrepreneurship : The intersection of two research paths," *Academy of Management Journal*, 43(5), 902-906.
- McMullen, J. S. and Dimov, D. (2013) "Time and the entrepreneurial journey : The problems and promise of studying entrepreneurship as a process," *Journal of Management Studies*, 10(8), 1481-1512.
- McMullen, J. S., Ingram, K. M., and Adams, J. (2021) "What makes an entrepreneurship study entrepreneurial? Toward a unified theory of entrepreneurial agency," *Entrepreneurship Theory and Practice*, 45(5), 1197-1238.
- McNaughton, R. B. (2000) "Determinants of time-span to foreign market entry," *Journal of Euromarketing*, 9(2), 99-112.
- Morrow, J. F. (1988) "International entrepreneurship : A new growth opportunity," *New Management*, 3(5), 59-61.
- Mort, G. S., Styles, C., and Weerawardena, J. (2006) "Networking capability and international entrepreneurship," *International Marketing Review*, 23(5), 549-572.
- Nummela, N., Vissak, T., and Francioni, B. (2020) "The interplay of entrepreneurial and non-entrepreneurial in-

- ternationalization : An illustrative case of an Italian SME,” *International Entrepreneurship and Management Journal*, doi.org/10.1007/s11365-020-00673-y
- Oparaocha, G. O. (2015) “SMEs and international entrepreneurship : An institutional network perspective,” *International Business Review*, 24(5), 861-873.
- Oviatt, B. M. and McDougall, P. P. (1994) “Toward a theory of international new ventures,” *Journal of International Business Studies*, 25(1), 45-64.
- Oviatt, B. M. and McDougall, P. P. (2005 a) “Defining international entrepreneurship and modeling the speed of internationalization,” *Entrepreneurship Theory and Practice*, 29(5), 537-553.
- Oviatt, B. M. and McDougall, P. P. (2005 b) “The internationalization of entrepreneurship,” *Journal of International Business Studies*, 36(1), 2-8.
- Pittaway, L. and Cope, J. (2007) “Entrepreneurship Education,” *International Small Business Journal*, 25(5), 479-510.
- Reuber, A. R. and Fischer, E. (1997) “The influence of the management team’s international experience on internationalization behavior,” *Journal of International Business Studies*, 28(4), 807-825.
- Reuber, A. R., Dimitratos, P., and Kuivalainen, O. (2017) “Beyond categorization : New directions for theory development about entrepreneurial internationalization,” *Journal of International Business Studies*, 48(4), 411-422.
- Schwens, C., Bierwerth, M., Isidor, R., and Kabst, R. (2018) “International entrepreneurship : A meta-analysis,” *Entrepreneurship Theory and Practice*, 42(5), 734-768.
- 関智宏 (2021) 「企業家活動プロセスをめぐる諸研究をマッピングする——経営研究における影響力のある文献のシステムティック・レビュー——」『同志社商学』72(5), 929-969.
- 曾我寛人・関智宏 (2021) 「中小企業によるアントレプレナーシップとしての国際化にかんする分析モデル——VOSviewer によるシステムティック・レビュー——」 mimeo.
- Small, H. G. (1978) “Co-citation context analysis and the structure of paradigms,” *Journal of Documentation*, 36(3), 183-196.
- Spence, M. and Crick, D. (2006) “A comparative investigation into the internationalisation of Canadian and UK high-tech SMEs,” *International Marketing Review*, 23(5), 524-548.
- Steinhäuser, V. P. S., Paulam F. O., and de Macedo-Soares, T. D. L. A. (2021) “Internationalization of SMEs : A systematic review of 20 years of research,” *Journal of International Entrepreneurship*, 19, 164-195.
- Torkkeli, L., Kuivalainen, O., Saarenketo, S., Puumalainen, K. (2019) “Institutional environment and network competence in successful SME internationalisation,” *International Marketing Review*, 36(1), 31-55.
- Tranfield, D., Denyer, D., and Smart, P. (2003) “Towards a methodology for developing evidence : Informed management knowledge by means of systematic review,” *British Journal of Management*, 14(3), 207-222.
- Weaver, K. M. (1987) “International entrepreneurship,” *Journal of Creative Behavior*, 21(3), 255-263.
- Welch, C., Nummela, N., and Liesch, P. (2016) “The internationalization process model revisited : An agenda for future research,” *Management International Review*, 56(6),
- Welter, F., Baker, T., Audretsch, D. B., and Gartner, W. B. (2017) “Everyday entrepreneurship : A call for entrepreneurship research to embrace entrepreneurial diversity,” *Entrepreneurship Theory and Practice*, 41(3), 311-321.
- Xi, J., Kraus, S., Filser, M., and Kellermanns, F. W. (2015) “Mapping the field of family business research : Past trends and future directions,” *International Entrepreneurship and Management Journal*, 11(1), 113-132.
- Zander, I., McDougall-Covin, P., and Rose, E. L. (2015) “Born globals and international business : Evolution of a field of research,” *Journal of International Business Studies*, 46(1), 27-35.